助辭本義一覽 上

ホ 2
734
1

池庵橘守部大人述

同嗣業冬照大人撰

助辭本義一覽

全二冊

千鍾房藏版

明治三十二年七月廿七日購求

門 梱2
號 734
卷 1

助辭本義一覽

提要

此頃ものしりぐさ人々おう池庵にまをしまして父れ翁守部ぬしたちの説を問へるものもう翁あやまりき方よりい論ざらんとこれにこたへるにまをしたまくばて助辭本義考とりまをしを七年ばかりあまりきこゆ其の書にをけとりまをしたまくこの紙ちゆえまりこれ入まをしてとして彼此とぐの撰くもちて問ひ人ひ紙鈴切の紙ち結ぶ紙業ぬ結ぶ紙ぬ解ちくしを得かどもとも辯へられうる所皆人ぬちでよりびて扱うるらせを

すんで情ちをれどいぐせる巻頭ぬもをものとられをもうこうもれば

まうぐうてうをれどもをもていばいばいよりらまづ用紙ゆうのもれと等

記て上梓せよ一わたりのはかりを簡古なるもたちわくくておのれ冬照小

今をれぬ。すぐれかくるかなて。さどくしの。さらいまぐべきにあられば。
仕せを。ぬりて。おろ〳〵。さらしつ。彼本書本義考は。一音の雖語ゑつ。ゑ
音れ。同合。呼吸の。動きゑ。ゑらぐめて。伝えゆゑ。ゑつをぐをゑん。證と引き。例
を。挙て。いと。詳くゑめせれゑ。ゑを。其徴證。例れ。如ふと。省き。要と
採て。只ちうゑ。音義れ。一端のを。うつぐ。抜出ほれば。をよく。本義考れ。一覧
ゑれ。ゑつゑぬ。こを。其本書れ。さぐ。しうゑん。れゑ。ゑくき。初学れ。徒乃。
うにゑゑ。ゑむ。さぐに。ゑて。れん。れゑの。本書。ゑ。ゑちが。稿を。脱せれば。
後こ。再考。ゑぐ。ゑうゑつ。ゑは。髮とゑ。ゑ。ゑ。

はぶかれ、誤字なども多くあり、本文もいたくあらためなどもあり。
人々くらみ見るべきものなり。

一 上巻の指詳の部は、下巻は三稿の格を除きて、三稿のみれば、舞の異ざま、
又ゆれともまりぬべき用いざまのあらをいとうで新し。下巻は受詳の部は、
彼指詳は新に出ぬるは、皆除きて下の文詳のみをつぐるなりとて、かく
のごとくに、そのあらうに格を書うんとうもいとく哭に普く引て、其れも
ひらかれ、又あれすべく名目ようもむかたよりもうんとて、三稿の稿ども
ゆえ、こまぐ、細紙にもまぐ、仕のすぐるを詞の名付、綴に数べてもみもの
五の綴二巻に出られる。ひらもうに立うべてにをは皆ののそらく童歌
抄はにらいひらうにうられ書どもに出て、そういう物るべ立のわづの人もうとも。
きどるべきまれば除るも、又二重にうあてにをはすぐるそらうにうに

ゆるく稀なるものなるも、文などもまれ、その混して章句もくるくるもあるも
あり、又はるるはるるものの、ものはをもくるはゆるはるはむもとを文の表
もれるものとて、本書にも、文部に出さんとて除うまれば、なもそれに絶
ゆ、又五巻はるるはるる出無除をそ、ふるーふるーそもーそもー寄の形、又七巻古風の可
の詳どものみを本書にも漏もれればそれらはこれて本書の追加とうとて、
まるも書うんほべし。

一 四書などは、元より學者はそべうのあるぎ、まなぶ入立れ見学とさくに
むとての わざるもの名れば、卑言も嫌うぎ、文字は雅俗にも拘べうべ、それと
もれるもまるものにも忍安、耳に入安のうんあるものぐく俗言、俗字を用
ひるもの多うあり、識者らもあてあるーぶやなれ。

一 ものゝ目録をうんもうべば、引見れ書もうもうんとそおもてぶ、女子の

簡略もまるばかりなれば、ふるくより有る物に、日録を挙んもとこゝ内
しかり明んとてもうつ、昔ゝ上巻共、いとゝ徒そのやうにてとて、下巻
なし、下巻ハそこゝに、紐繞に三種の辞どもをしたいで、其末に、玉の緒、二巻と
なりぬるこゝろ也、後辞どもの中にもこゝでうれそれ辞どもと、俗にいふ也
て出しつ、大ふ此次第をもて、もゝ辺べるる也、

天保六年十一月

橘冬照識

助辞本義一覧上巻

上指辞部

橘守部述
同冬照撰

下巻三種上段指辞 紐繞 右行

○ハ

その音ハは、又歯、葉、羽、端などの如く物を切分ち離つをは一統あり、
一統といふ、總てはは音毎に言はは統五統ばかりある也、
その一統をいふ、此事の考へは、五十音図説に、詳く挙げ、その音にて云
詞は上に、離、放、葬、排、投、撥、掃、散等は数多くもは此故なりけるこゝに、
此この辞をたとへば二つある物を、是は、こゝ〜と云て、一つ取分る時は、殘る二つハ、助て
わろきゆゑ、又右は、完しと分ちて、こゝば、明暗まで、を、暗つけ、なりし
ゆゑ、ハは、ゆゑ、ゆゑ、是とて推をに、所に、書は、きこゝろと云、冬に分ちて、ふ
辞、ハは、きこゝろ、と云も、夏に分ちて云辞、其中には、軽き、と、重き、と有て、
づち、分ゝる程ならぬもは、ゆめ、など、なれそれも、辞、至て軽く用ゐる、あ
の上ゝを、是てを、皆分ちて云方より、出ゝるなり、又此は、歎息は、一

続あるこそあ行と同じく喉音なれば也。そはあの音にて、あくと欲くと、又はの音にても、
れこアと欲くこそなれあるべし。笑ふ色に、アハハハと、笑ふ子と、ハハハハ、
ハハア悲しやなどにて、涙の多のあるなども、皆此故也。さてはれはれこそ、
はれ甚しハこアるなどに欲く事中國過ては、今も專云ふなれど、東國にて
きやきくこアなどにて、はれハ、稀しく、とそれと二ツ相重なるなり。
老人れ言ふ、あくれとそ云也。はれ欲息此除の下に出ッ。此ことを以て考べき也。
欲息れ言ふ、あくれとそ云也。はれ欲息此除の下に出ッ。此ことを以て考べき也。
ちくに三種の奇どもを挙げる。巻首れ提要にそれ考べきなり。

古十九 あをを柳ちくのいとくもりてうぐひすなのめふてよ笠はうれ花うぐ。
拾一 ナリケリ
ちくにちくれてしをうくるあ。ちくもりてくもりてものはうかくもの春雨。
ナリケリ
咲ぬれ格ちくきてても君れ分ノえとといくで古今なるあて学ぶれわちくこそ笠は
きれ知ちくもあくず。花ぬ色もあくず。梅の花ぬナリケリと尋常の色に対て。取分
こうえくる西。拾遺ちくそ。ナリケリ。ちくれバ名業小松と。結ぶ子も多うれど。先ッ行ち

結ちくは。常れ考ナリケリ。他の子に対て。取分ちくる也。それハ留りの下に結う
取分る歌詠の。ナリケリれ含れる也。結ちくは此れと云て結ち。動ち言て結ぶは
ちくちくそいうぐ所ち諭しさよ也。それハ。それ指辞ち限りてかくあるに格のあるも
ちくば。結ちまぐきちもあくれど此格ハ次れもそや何ちそ。ちくも。ちくも
ありて。只留りのちく。結び辭ち宿るのちなり。ちくに上ち指辞ちにうぐ除。
徒の格ちくちく。
古九 ちくやくしちくてくちくこの条にうぐ川うれ花ちくれ山
日十四 あちくちくしちくちくてちくうぐ山ぐ川ちくれ花ちくれ山
なちくちくあちくる西ちくち多ちくち。ちくちくに対ちくても。動ちくれ言ちくちくち。ち
べきちくあちくぐちくちくちくもちくぐ。ものちくれ下ちくちくちくも結ちくちくず
ちくちくて。事毎ちくは得ちくちくあちくぐ。

注十九
うくるをもとゝするなれば、かくあぐるよも昔ぐるまでは、やはり、その里
新五十七
ゝ、ゝ、ゝ、

るべしとあり。此等も、さべき方、悪しき方と、一つづつ取分ち並べべく、
考盛をはべくきうせるあり。

古一 ゆゑは、杉のゆくべたきるるにうるはは野べれ刈れたるるは
同 少しはいとゞ、ひとしらずもくくはは花でありしの美るたちしある
さべめるるは、きのきるね方と、美めきくわるれつむ方とと分らて合せ
る也。でするもべ人の分れしれべるき方と、梅のもれるべるる方
とを取分ち出てる也。杉は数、義種ありて、皆は定るなずらへ初じ。

古十六 うずしまれとるるれ知るものるべば山のするをあれとばるて
普万下 杉もしるは大そうしたやもるわるあるるるをるべるはして
古今るるそ、義とあべ、るはべるわるるる方と對て、あれむ方を分ち
出てる也。普万るるは、まて對て、まべるはと取分ちる也とをべ

置るるは、をものをこ彩をとあり、をは、ばのまるをこ彩をとあり、ばは、ばのまるをこ彩をとあり、ばは
ばを、猶
別なべ押へ辞りて只おのべるるるる。此れとまの結ゝ、ゞつのはるて別ゝ峯ケ
るる是も絶べるべき論ーべるは也。をは上のあくはと二ツ三ツ合せて置るる方
を、一ツ物ありて、ゆゑれば一格るる為べられべはもべ一ツるる也常のるるて即
是は、彼はるべ云はるれば別ゝ格と立べきるはあるまべきわべなるる。

但格三 るるべべれはるべれみるきれるるるるもべべ苅れるるるるものべべ
るは考れるるるるるて、五月雨るるは考るるるるるる。

もも

古十一 かるるべのべ色るるるるるる

を者る亀九て因幡の重る附そ打のぼ〻こ二つ者るそ旅人と〻タビトと云報のあ
しさてもう欲きて〻と〻〻る工に行〻〻れ上〻つ〻下したる餘情れ
あるみる也古今十一る海そ〻考は〻はれ〻ア〻コヒヤ又イカニセシヅ〻なぐ〻つのを殘る
十七なるそ〻わ〻〻〻〻わは〻はれ〻ア夢ノヤウニ過ル哉又或ハ再ビ返リガキコトヨなどの
哉のをれ終れる色是と尋れ竟もる詞と一方ニ〻れる人もあれ〻もう限れるそハ
あ〻ず古今せる海〻〻〻ぐきれをのずれ寄るぐれ留りのトミ サテモ〻深ク積リタ
ルコト哉と云ち〻ぐの言れ含〻ち又も〻あ〻歌意のをあり〻ては〻恒のはよの〻雅
も打〻上〻なれぐ〻はも打歌意れをあ〻る〻ぐ〻はにつ〻ぐ〻〻〻〻

はを濁りても取分つまる所ゞ濁り色されば好奇の云れをばもとより生る濁
れ山ゝは松のをゝ[illegible]ゝ[illegible]にかゝるのわつ肌つゝもつ[illegible]とゝ固
じかゝるゝ如くもゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

て共對睦結搦紡群叢連け敷まの音又股跨儲混交眷紛迷紕
纏縻の訓多うる。れらく五音皆合て右の音義と名づし又もも欲
息のをなるゴあるまて喪最燃悶脆等の訓れ一紡まあ。こそ本愛悪
ともに眼るるて思ふに堪ざる方ちり出てる也萬葉五長母に父母を
忍れば貴く妻子れば米具斯宇都久志今の俗言に子れ愛憐にも
ムゴタラシイコトジヤなどえムゴイメニアス
ゴリも即此米具斯也弦せる言也ゆゆしみて神代紀に憐愛又仁慈愛
恵多ぐ訓る合て。めぐしもぐしも本同語ゆえ。たに出ども欲
也。ものこと。考ふし。三稿の格ものに載さらるゆえ。いらぬ。
新古十二 考て。米ゴ上ゴ戸とも。ものしていたよろこばしく。今のしの始
後拾一 ものしゴ。ものゴてるとうあてるもの。わるしーしらるる
モ数の字ごとに。ものトエ。四ゴとこの合めるも。この言に本相並兼ることあ

る故也。結句に。ものやと含ること。ものの言は餘勢也。れらと。この結に。勢ぬ。
ひもぶもといふ。ものの除に弁ぢるゴごとし。
後十五 これやこのゆくも帰るも別つもるもしらめも。あふさかの せきは
新古十四 わづらひも。ものこれも。あふこのれて人。ともかともの。あふこのタ。
モ。ものトエ。ものこと。ものトエ。ものこと。ものトエ。ものこと

見又この際に弁ぜるごとく

古一 たちまちで散れこう見きん 梅のひとをもうとも（二ツナガラ）もる人ぞしる

数吉大 ひとをもするみしも（同ジコトク）ひとをくるしみわびてうしなのこころわをるやーぬるん

これのものに下に、両ツナガラとも、同ジコトクとも含るもしをと云て、右のをあるべの故也

後拾十四 ーこころ春もゆめはせもすがらーこころ（皆同ジ如ク）ーてつぐ矢ーつること

同四 あるも秋こころひとつ月も月ひとつこころ（何ヒモヨウ想ヒ多ク）きりみじ者

うゆーあるる雲ふるまれ杉ある右のをに、をあくまし、傷ひとをんたる例も

にて、味をよべきもの。

千四 ひとーくるーひとーくるーひとーくるー

あぐまりてゆくもののいやしほどうるはしーいあ
わくらばにあくやさ月のくるしもいとものもしぬればあーいつ
るをと軽く添るもとつかうこそ彼歎息ものイエアと加てゐれば
引れハマアと跡エ付ても引ハ苦労デナラヌ・モウク、部ナコトヨ・などゝ也・言の
の音エて・ヰウ也・さて此もの・直エ・アの言エ・弟るも有・又もの下
エ・ヰアと含めるもあるも・上のもれ下エ・又もれマアと・含れるも
一例なる・されば・さの相兼るもあり・却て重ーとはゝべし・軽しとハゐれ
まぐきるわ・かくて上のはも出段のもを恒の用ひざまの外ハ六欲・島の一種ある
のみ・を他ものゝ・ぐて右のごとく・ぐくを七貫きて・ゐるとゝぐエおきる箇
條と分ているなのくエ・ハ・く人まぐゝをとゆさく多うり・
五の結エ・挙てるゝ除のあらまーを・ゝぐ・次のごと・三十五種エ分ちのと・二十六七種エ分ち・ヰ部
なくエへまりてさ・六十七八種エ分て・そのかき也・是と妻ーとゝぐ・妻ーとうるもあるを

中エ・全・同じゆ・ゐるエ・多のるに・時文エ分ちゐて・何の格・それの語と・ものてりせかーを・
迷てを・ハーくはるゝをそれを・を・を除を・ものゐるまぐに・迷ーとをひ
るゐれて・おくてにをけエ・倦はれ・終て・何をやりんとをく・はもいまりるゐぐを
これ・エ・せ・又・他・ゐ・を除を・金つほどまては・むけエ・言のをとをゐ・ゐ・適・加へをくゐる
言くをく・ゐ・むつ・ゐ・くのゐひるーてゐぐをくエ・紙きものゐを・黒ものんーたがりへをく
で・ゐをゐりける・行をても・彼・大人ゐて・ゐるゐまてがくゐりのせゐふゐ・ゐぐゐみ・男ゐ
エ・世・ものと・出せるほくを・京エ・蘆庵・菖蹊・江戸エ・千蔭・春海の主達・河ものを・ものまで・ハ
かゐる・方エ・ほ・ふ・くゐ・の・せ・ゐれ・ゐ・ぐ・ゐ・ものも・れ・ば・本居翁を・そ・れ・ゐ・く・せ・の・ゐ・ゐれ・ハ翁
も・又・が・く・エ・ゐる・人・ゐ・ど・ゐ・ぐ・ゐ・ゐ・

さるてがなくて、こさもの安うまを生捕りてけくられすうばめでたき書れ
いで来るまーものとあやーき方ぶくくぐあ初學のちにへとおぐーく。
源義経記書とはまつるやとわが文盲笑ひまぐでかられる。

下巻三藤上段格 紐鏡 右行

○徒

古十七 わらべまつまぎのみ肝をとかーしたまり老ろろ肌ろろきまぐるー
円九 みやこ出て世ふとうの原いぼぐれいうち風きまりー ろろてうせ山
百二 えわつ山のふぐるをゆるらじ。の中かくのこ故ふぐくとれるひきー
新古一 うそうのくりりーさまのそりぐろもかぐのもかぐのこ取分ぐ。ーもも補兼ふ示ぐくこすと二もぐ。こ云ぐげ
徒とをかくの如くーもも取分ぐ。ーもも補兼ふ示ぐくこすと二もぐ。こ云ぐげ
て上一指詳と置ぐるをつる也。此格のくるを皆一ッ。すーて杉ぐ。
分寄すに多ろ。かれば此格を元来ーーもの部ろもをぐ。ぐ。

○で

ーさ行の音ー植竹植苗芽蕨根生萌芽等は一続あるを。齒は音ーて齒
を。口ー根生る物ぐるぐ故也。此一続ハ下の三指部れ六段又サ
此さ行れ音ー物と指て云詞多ろ。前と云も後ろ。先をも指先よ
ー。後をも指ー。以前ろ。以往をも指ー。以往ろ。以前をも指ー。是五ー
指て云詞ぐる故也。岬崎ぐも。ち出る處をー。的神武紀 刮的 も。箭も

下巻三搏中段指鮮 紐鏡 中行

ぐ。ぐ。ぐ。

當を指言・刺差・指狭渡等も、皆右の定なり。又定誘・率等の類も、
なずらふべし。又志の言して、然とも上と指云云（神武紀訓云云）と云ふ者ふ
を指ふして、其々といへんもわれべし。古事記・萬葉等に、其ゞ花とえんと、
斯賀波那・其ゞ父と云ふを、己之父なぐよみ云ふも、上に其ゞの出ふる
を、再ひ指て云ふときの詞也。標・導・築・篆・印・知領等のごとき又准ふべし。
又々此その言に、彼處と云ふも、所を指て云詞、足下と云ふも、對ふ人を指て云
詞也。凡此等に對へて、てにをはのごとき、其の義ふ云ふと知べし。そと濁
も上より引連けしる、下に之のみ附る故に、上れ言に牽れて、濁を習へる也。されば此ぞ、物に就て其物事
を、其と指定めて云ふ事の外、用ひ来る字書に、其爾等の字と、指物
之辞也と注せる事因し、其をそとのみ云ふ、恒に其所と云、其者と云類、
奇に、そもそもに、そもふこと、あふうがめし。かくて彼ある物あふ物、

指定め云のみにもあらず、物をゆびさしてふるもふるもこれを也。そを今
云ふ。かもそのかもかれしをつて万代をいくふつそ神でもふ。比叡・春日社をゆび
さしもて、此御社は神ぞと云云といふ、ゆびさし也。さて此ゆび指定められど、神のこゝ心を
ふかふ云なれば、神ごとうふなれば、いと極ふ尊ふ事也。又因十八ふる、かづらをみやふるつをもうそ尊ふ事
也。さて、これ此通りにふふ云ふ、こゝ自のうなれば、ふもと性に云ふ定めふ。
凡そ此等と以ても、てにをはに結びと合ふ方ふも、此の云べき故とふふ
て用ふべきかぞれふと思べし。扨てに、三轉の格をも一ッ出して、彼指定め云
ふ事をいへべし。

古二 ちふふもむふふちぬふもほふべ人のふろそうぜもふふあへね
後十 ふふとちはー出されし舟もわれぞふべのなきふちせ

此古今を通じて、紀に對して、人はぢぶれる方を指定め、後撰に、ぶよ
船に對して、家分けるべき方を指定めいふ也。

古十八 神代月しぐれ降りぬ降る時ぞ
注拾十 杉むらめくれ立れもなくてよひ〳〵ゆめ〳〵そそ〳〵ん家ぞ引ぬとと

此歌を、指定めるなるに、なると云受辭を省る也。是を玉の緒に、動ね
言にて結ふぞとらる。既に、はの除に、并へるうめし

千五 雪もふらばふるべきにのこそ降ぬ〳〵とくるべきもの花。
こそ、ふるべくこそ〳〵と、指定めて、そを、おし、もち、動に、入れて、動
の下に、彼引ると云受辭を省るなれば、指上るれば同例にて、こゝに、
れるの字は、連ねなり。

古十二 わがこゝへそゆくこゝに、ぞ、もし、あるを、こゞ、ちと、ふ、ける、ぞ。
詠

日比 名をもてこそ、をれるぐらめぞ。こゝに、ぞ、れ、ぬ、ちる、きと、くゝ、かる、ふ
玉の緒に、此歌を、加へるぞと云て五種に分てるも、ものうるさしてこそ恒に、上句
の所どころにて、其と指置て、次に、ゆゑ、ゆゑ、を、下に、こゝに、結ぶ例なると、
こゝに、格を、彼方へ、ぢぐる詞を、上句の間々に、皆いひおせる故に、その指辭と、こそ
なれ、ぞ、めも、で、引下ケ来て、即て、ぞ、ありと、ぞ、以て、押へる也、さて、此歌のぞれ、
ふ、ぞ、も、切る、こゝ、ある、を、然う、押へる、下に、ヨの言、合る、数也、此より、ハ、多く
な、れ、ぬ、く、上に、指と、下を、押る、ふの、ニッの、ぞ、ぐと、今の、俗言、以ていふ、ぐ、其が、然ア
去去九 是ハ、ぞと、上に、置方なる、ぞ、とも、彼へ、去去ノコトハ、如此、其に、置方なる、ぞ、とも、ぞ、こ、ぐ
ぐ、し、又、ぞ、く、句、に、終に、置、ぞ、る、ぞ、ぞ、ヨ、と、よの、言に、含れる、も、俗言に、彼事、云云
ゾヨとも、其事ハ、去去、其とも、去、即、此等の、ジヤを、其よの、訛に、傳へる、言なり、又
千に、此、ぞ、ぞ、ものぞと、く、受て、へ、るき、名ぞ、ぞ、ぞ、

とゆうて、ぢくへはぐ、あいつるも、ナキ名ジヤと、時ジヤと、云ふ也、かく下て、ジヤと云ふハ、上て
必ず其ハ、と云ふ助辞有ルともて、
推定むる言のをと、知べき也、又うしと云辞へ續くて、かぐろぐろうし、
此の中ぐうしと、結めるる歌も、かぐろぐろぞうし、此の中ぞうしのをとく、
ぞうと切まる、ぢくへうしハ、添る也、

拾二十
さくるぶたはまぐくるくわくぶしまてらくひのうちいうそ
同十二
ゆめうつくも、おりもぐくれどねやをせ、ありぞ、思ふわもれぐるをを
これも、俗ふへ何ホド其ハ、何ジヤ、何ウ其ハ、幾等其なども、故と問て、押へるを
ゐるゆえ、切なる、

後六
をみるぐ、まむらぐたむれいつをたれぞうしのあうにてるものぞ
四十六
あをるわちたらい、き道もちまをどうれ、ふたるふろぞ
つゆ、ふ、ぞれ、などの歌の結言の下に、他の言を喩てゐるも、俗言ふ、誰待テ、云云ス
ルコト其ハ、何為ウレシイニ云云ル其ゐど、坐云と、又ゐゐと上ふ附て、其背ハ誰カ云云為ル、其
者何為ニ云云為タヨ、なども云ふて、此歌いづれも云ふ、續くるをもいれわくぐ、又下
と、かくよと受て、なぶどのさきそどよ、何ぞをもき、扶の歌ぞとよ、なども
よむ歌ぞ、大方ぞてよのことてしよを所ゐるやうる記也、又ぞはとは置て
ぞう為ふぞは、いうれる人よかくるものぞは、などいるけを歌、是て、例の俗
言ふ、誰為ニ将為、太ニ為其ワイ、他人ニ将係カイ、オマヘニ其ワイ、などゐワイふ
常りて、ももふやなどのいちと同し、歌の結の歌ふ、此もにををのとのぞをいみ
しきひうの也、いとちうらあり、歌意のをを人含たるものをや、又のる山
何ぞはあり、いのちやを何ぞをあり、云なども歌意ふて、何ぞはをとと、
含りて云べし、次るぞもと相似ふ、されば右の古今集るる、いのちやけの可
と、六帖ふ、何ぞもとて載セ、菅家万葉ふ、かる也ふなるぞは者の、云云の行と

一本ニハ、ふるでもとあり

ぞも

古一

いろもかもしらであるれとおもひのれるぞ袖ふれしやの梅ぞも

拾抄

いそぎしく袖こそきつれ出ぢとに　いろもかもあるあきの月ぞも

これらハ問ふ也、ぞもと問ふを也、その俗言に、其者何に其、波八雑

其者どこうぞ、もを歌意にて、賞美のあまりに、袖ふれし梅其ニア、

いろもかもある月其ニアと問ふを即ちむる也、さてかうにふるれば俗言と

引出こそ、てにをは、おのぼらのをのおて、俗言のうへ、をもをもを

たぐふまれあらねバなり、

ぞやい

拾

いろもかもあるのさくらぞやこれ

いろもかもしけぞやこれゆうもそれをくこそ

歌の結これらのやうに、ぞ、やの、ぞ、やハ、ぞ、に通ふやう

で、問うくる也、此ぞとやの差とうぐぞ、ぞ上のあくぞ、ぞと、問のぞ、辞で、

呼うもて問をまてにあるぞやで呼うもて問、ときの点也、ぞ、ハ

右の句ども、以てかつ、ぞ、し、大方歌の結なぐるぞ、ぞ、ぞ重ねることたをは

ぞ、つ、ぞ、ぞ、ぞ

活る辞弘十のそなへば新古今に八なほそのくはあるを例あきひごゆるや
あらん。已上玉の緒なるべし疑ひいへるを彼人なも似ぞ。とてぞ。き説ども世にあそ
を本曽伎ぬ思ひて曽伎八万葉に山乃曽伎野之衣木とする天地乃曽伎綱な
どをそて物も際界涯といふる詞也書紀に虚空とあるも空の極み是も
出く集中に幾許と書て八くばくとも八そこくこくもある此くばくそく
と八そこくこくそと重りて八くそばくとも八くそばくそもそる也恒に
八くそばくとそも幾量許とも也後れ物語書などに八くせのそれの
いくせのうきめなどつくるも八くそくせと通音にて同語なる明らかなる
物を記のまに八下巻受辞部れ初段に云と合せて委きまを明らかにせ
ばこそを此段のそ部に出べき辞なるあらまほしく部にこそ出べきなれ。

ありなくこと物なくこと物にこそ

もくこくあくまれてきこくれくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこく
もを既にのくる如く物と相兼る辞にて恒を大方甲とにとと相兼此と
彼とと並べ比にて云ふべきなくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこく
異にて今と今こうの以後とを相兼てつくるゆ即てその指辞の相物て
所謂行末と危ぶむことをなれる也されば下の詞に云もそする
を。くこくの後と兼て思ふに恨そするのを也又八くこくこくこくこくこくこくこくこくこくこく
を兼て安ずるをあくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこく
とくこく
こ

拾六

[illegible]

此等のさまを却てとゝまりて、秋せるもわろし。[illegible]

[illegible]

[illegible]

詞をあらぬ故也。もとゝ[illegible]

[illegible]

句ゝ多く[illegible]。[illegible]此言のさまを其のまゝを歌息也。[illegible]

此其と聖出くること共、語句[illegible]似て[illegible]

[illegible]のまゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

後捨ることもぞ。こをうんとて結びて。句をうけて切れることと。又とは受けてうけぞけるこ。
凡このく受辞をば下活のして續くるものいづれのてゝとはのてゝもいとやうの
ることゝ。ゐの緒こゝろよくぎりくるべきこゝろ。
千十一
わりもの　やおもこゝろけるるべ足ぞ。れ。とも。ぞ。せま。その。紙
後十五
うけるまのこゝひごゝろぞあけ。ぞ。あけるべ人をゝとゝにこゝ見め
れゝこゝ。ぞ。のゝ下。受辞のなるゝ言を省る故。切も也。ゐの緒の歌也。
ゝゝ。うゝば。

ゝ

ゝ。ぞ。所有言ひ中に。最一なるべき。うの肌る音ありもれば。恒切て詞の連接と
もて。離くる。韻語ものを活て續くれば。即て連て續つゞるべなま。
ぞとへば。山。禁。里。家と。四離れるゝ。山の
禁の里。山家などへへば。即し狭くゞ如ゝ。即此音て信。延。伸。慰。斗など

の類はあるも。延ゝのゞ。ゐる義はあるかぜ。又も音邑。そゞれて柔和ゝるゝれば
此音て限りて。幾つ重ねても。耳ゝさはるゝゝ。此て先ッ此音ゝ。ぞ。ゝ
に。和ゝるゝ。大ゝ。ゐとな行は五音相合せて。いとゝこゝいくゞ。風。和。平。善。宥。兎。
慰。撫。摩。直。平。平穏。靡。馴。娜。娜。嘗。紙。滑。煮。柔。和。黏。滑。光。綾。沾。
塗。萎。草。菓。沼。泥。濘。錬。煉。調。練。黏。埏。寝。和。長閑。海。苔。糊。血など。
此等いづれも皆平穏なる方。又濁ゝる肌る方。ゐみ依れるとして知べし。これ此音
も。舌音。れ和ゝるゝて。た行も。舌音なれども。其動き状。やゝ烈ゝ。き
程のたゝゐある。方ある故ゝ。此ゝ行とは言の活きも。又それ
廿六段などゝ。合せて。ゐるべし。口ゝ喝ゝ試むるゝ。黏ゝ。摩ゝ。如ゝ。摩ゝ。
ゞくゝ。ゝ。音義も又それゝ。詞ゝ。ゝ。ゝ。

附方 この二続け外を多し。接き連る方を。

万三 いもせのきずなの時のうほのうへのゆくきれば物なるを

新古六 冬ごもりのそもの朽ぐの志るものうへにおもる月のうぶのさもりを

これの奇のもの多くて也。句々離々まもりて語をなきざさ〻にかく

多く入混りて也。耳もたゞ弱き所多くもこれ二ツ三ツぐ〻ゐ。

入まじらぬを。をを〻くなし。いもの〻ぐを禁ずれば。ゆゑ文績くを

あつ八さ〻ぐし。又物に親〻に附方を。

古十七 水のうへにらうぐるあれの光るを。

日二十 をぐろさきをしのらむの人をばみものつたにぐをうらと

假にこれこの奇にもあるべし。かく物の下に親を附ちなづく船之嶋之と之通

ひてちゆる也。を恒に。天之國之神之君之ぐ云彩の之と同じ。即汝爾若

如似なぐ代言の通音にて。船之を。船汝。嶋之を。嶋汝。天之を天汝とも

むづわき也。人の字。又物の称なぐを名と云も。右代の通音にて本皆一ツ

なり。万葉三に志斐と云嫗のをを志斐能我と云。十四に夫名と勢奈能

とよみたるを。其同巻一丁の末に勢奈那とよみたるかれば枕詞に春花之

云云。照月之云云。零雪之云云。なぐ者るも之れ下に如を省るハあ

らで之と云ゞ。直に如の義なる也。さば〻如ほぞを如ら〻如。玉如。

や〻敷如なぐ。續けるに合せて知べし。又ふこのやうぐの山いうものや

いうほの名。石見のや高角山。河内のやゆゝき山。ちゝせのやゆづきゞ下云云

なぐやゝに置ものも。右代志斐能敷那能代類にて。汝の義也。をを此汝を。即

ホメゴト 美言にも云。詞なりれば。大國主神の御功を賞て。大名持神と申

タヘゴト に稱言代方にも用ひて汝命。那兄那姉とも。又下に附て彦名表具那於伎那

も又倭根子（ヤトネコ）・伊呂祢（イロネ）などゝふと用ひたれバ本を直して右の如くも物
ふ親しミ附て汝爾（ナニ）などゝよりも出たるもあるし又此の言れ右の如く物語の
下ゝのみ附て用語ハ下ゝ居（ヲ）たるも右の意なれバ也かれバ物と指定むるぞ
なるゝも其音義元より異なりて他の指辞ハ如く結びに開（アガ）るべき言ゝハ
あるべきを何等と同じく相並で一ツゝ心得来しハいとゞ心なきなり
くゝ其ゆをいまゝういたんに

古四 待人ハあるぬるものゝうそをつくれ共のめづらしきるる
後十 かもものくもいふことのまれなるそあのうつゝどころハ
られのれも彼紐続なるに当れのゝあるとて引まるべ為のちゝん
月のかくるゝなるのれと同じゝなれどだうゝと通ふ

古十二 花をきるゝ出てゝ多ハ花をゝゝちゆゝへゝもの山をばれ時

拾一六 ゝものゝとまちうきゝに咲しゝうどる人まれゝゆゝのあり
これと同しのるれども引くゝと定めゝ

新古三 むらぎもに影ぞ見ゆく山のあれあるでも月のうゝぶきゝ久
金 ちゝのゝ浦ゝ市しきも雪のこゝちしてむすも袖のぬれぬるゝ

られゝと同のるれども引かと留たり・のもかくゝのれの辞も随れバ彼ゝ物
の格なるゝ云も只皆それくゝ隠るゝて書ゝ度ゝも徒の格ゝてき現在
きぬるつる引るゝん引ゝるゝ留ゝ例ゝ引れバ別ゝ其格ゝゝ
あるゝるにゝて云ゝる故ゝ右の如くゝる引ゝ久足・此三ツゝ准へて・ゝ足・
て紐続の右行の辞ゝもしてゝ面 る足・た足・め足・ゝ心
るゝ多ゝるゝゝして結ぶ方ハ恒ゝと多ゝくゝ後ゝ時
の格ゝ出せゝゝ却て稀ゝ引ゝれバゝて玉の緒れ一巻ゝ中ゝゝに出るゝぶに
ゝ求めゝねるゝまにて行の足ゝバゝる一ツゝ多ゝくゝ足ゝゝ引れ又

古一 あと柳のいとすがらにはまもしもそなたてものちころびうる
日十七 はわらまを風をも見ぞ〻しられぬ人はいとまおるる
これも上とおれのるるとぞと変れり。
同一 かそごのくちれつるやしろろれ袖ぬうちてしたものゆくらん
日十四 ゆくあそうの川はぞみるばかりあり人のおるらん
これも同じのるるとやとうれおり。
同二 そのみぬるぞにあるをはくくそ紀ぬにせよそのうぞのみくらん
いのちぶたちくろにうれのるるばをしわるれのるるこしかし
ろろも同じのるるとと何と重れおり。そ彼紅葉の中行そや何ぞ一つ格
の結辞なるるをかく同行れ重き辞とかそれて也置まきそのるるた
れをちくうるはく引るるぞくても待びそや何ぞそ等しかそれ

いるるそて元より結びて拘ぞき言のを〻と覺るべき也物るる西の緒
をぞにのれ格とて分ち出せるのそをるるあどもぞふそれくの結もあ
るぞめくに歌もくうちおりめまぞそをそのの所どめあるれ
中より適ぞそをちよれるとちり出せるうるを後より足原故不
こそあれそそ紙ぞりしるを其引出せる本集のそぞての所ども
を足合せて明うるるり守部そぞりにかくるはるるを大方のてくを何
れも それくの用ありて置るり上のをちくいるるにけを物と取分
ちもを物を相兼ネそを物を指定めや何を事を疑ひこそを物を
撰び出るぞ如ゴト各一つばくの用を役エダて置りぞるる所と又それくの
受辞もちづめもあるべき物りるるとのを右のあくゆるるる音な
るれば別に受辞あるべきゆるあるぞとて八代の本集にもるると添く

試てばかりをとゞめてもかつ。ゐれども愚なるべつ一ッとして推拙べき
るあるべきれば。かくに先一端とらん置て。格段の定とまつるか。うれ
ばあの結ふは。此のみも格と立て。廿六七箇條に分られどもそれを結の
格を。皆除きて。只辭の用べきあるべくを。二三出候まつ。

古七 ちはやぶる神のきろくに□はくうにたちそなの坂もとろねべるまり
百九 ちてぶのうぶのもれはまおごひてそぶれるとうに□あ川めぜた
此歌を。の結びて。きげるて切て格とられど。のと結びて切れる
まるあるべのを。ふを云あの。親〻に附のて。結に。紐続をそふぐ。三十八九
段の。二轉の格まて。只ゐ。引らて。切まるるり。

古十四 君やこゐわれやゆえのいるとうにたまあの板ともそるばねるろう
段十四 ゆめとれバはるべでしるぎき結人のこりやらどやの。のたぶかまれば
心ノ古

此歌と用の語より受るのとゝ。これもかろし。のを既にいるゆうに。體
語の下ヨの今附て。用語より受を受る。絶てあるゆ。し。結ることれの奇
ヨ。用語より受るゝを。其處ヨ。神語と省き含めて。ほぐけるる故なり。
そを古今ふるを。八君やまえ系やゆうん 卜五 のいとへとえを畧き。
後撰ふるを。ふゆやらどや 心ノ古 の定めるれど。云ほどの言を省き
て。續けるを也。ふれじのりまをとるを。八忘れど 卜云契 のをるり。
八そちのほどとつけるを。八今を 限り のを也。八そのみ八そけのとき。
八今ものきはるどゝ云もなずゝへてゐれど。結ゝ此等の所由 ユ上 を考ゝ
で。只用語より續けるのとれをけちゝてを。初學の輩。の言も
用語より受るどあるとまゝふれて。どうり出るんもけるうぶるきを
なゝんゝりや。

古十五
ふきてるかぜ野風をさそひ
好忠集
野ぶしの
源氏蛍
あくがれてとぶ
栄花ゆめ
ものくるしぶ
後世の俗の
之の居べき
奇を
何の
置
切れ
やどて
上
熟
何
袖の
袖
袖の
袖の
袖の

さるべ云ッさま・物れ際界と指て云言まれば・さべしき 限ナラン うき

限ナラン のを明るべでうし・物此さの今ハ・下巻三時部の初段ニ出ッ其条を見合べし

千十一 たくまれ出てもる人をきてもれてらのれのもや 為おもりつ世

好忠集 世もづまれしかづのとふろ和をよまもれ神をあもれ出もう

此数のはも異ふうあるが・人の俗言ニ・常一通りのジヤ・吾レのジヤ・オマヘのジヤ・

なぐ云と同じの也・そじもて出せる・船之・小嶋が之の乳・又汝爾等の親しケ

附言はもとも・ふれてよ・文ケ古くもう・殆ニ此用ひざま・多くもる

古三 まつもの・ふもうとれバ・ふくしとこ・ふにあくるもの・め

もれくを・言と隔て・ふくうふのと云て・一格ともう・ふれど・こそで隔句

躰の今もて・言を結びてもあるず・

万八 ふるること・もうるるのぐかうやけけのあるぐと われるれるや

これハもぐもう・結句ふくうもう・此外ふもぐ・てもぐ・なるもう語る大方障句

禮の当ふるもふたもう・のもう隔てもと一首ふ玉て・それもも一格と

でるもまりもひるもぐもう・ぐや・ふるて是等とどて・の言れ結び

もあづうふすぐきうと・ふくもぐも・ふぐき也・

下巻三轉中段指辞紐鏡中行

ヤ行の音を唱るに・喉音三行の中も・息を一ふぐに衝出て・甚ニ烈しく・

且ツ急速なる音也・ここ一端をいくぐ・膽と・いと云・膽もう吹出る色と・息

と云ッ・いきは・膽氣ケ義也・気ハ・字音ニハ非ず・日気・火気・潮気など云て・元来の古言也・又勵ケと物と・

弓とうひて・弓もう飛もる物を・箭とび・箭を飛ヤ行と・射と云ッ是皆ヤ

ヨの・通ヅ如し・されば・此いの詞も・稜威・勢・勇・勤・闘・忿怒・憤・妥恩など

の新多ウ・是皆膽ニ因て・云詞ども・なもう・又嚴・重・茂・弥・益・最・甚大な

ど云類を。右は勵む方に派れて。嚴重なる方に往る也。又齋忌努力。勤齋忌禁などは。彼勵む方より。やゞてちゝを入て。ゆゝしむ方に成る也。扨やの音のそべてれ統は是等に局らぬれど。大方てにをはの上に用る處は。疑ひと。歎息と。喚問との。三四種のみなれば。さを見ゝに用る音の統のことあゝ諭されるとさて彼へやと叫びへやと愕る。などゝ云類を。右は急速なる統也。急に飛ぶ物と。箭と云ふ如し。又事に甚切なる時。阿那耶と歎き。阿夜尓畏しなど恐るゝも。愕るゝ因に心ぐへて。彼嚴重と。齋忌とゝ云類は也。即身に受て。苦く疼をば苛辛痛など云ゝ。合せく考ふべし。又やゝやて。やゝをはしなど喚ふくる類も。急速なる方に統なる也。又續紀詔詞に。藤原朝臣麻呂等伊百濟王敬福伊などゝ名の下に附て。伊と云るも。古事記に。我那迩妹命夜。万葉に。妹與汝与などある。夜与の通音にて。即呼ふくるより出る也かくて此喚言は中に。やゝいう

に。いゝやゝ。などの類を。喚ふくる中に。問ふことあり。問ふくる中に。所由を。疑へふことあり。是より終に。疑の方に。一統派れ來るより。即幾如何のいも。疑のやは通音なることおもへべし。されば當に。疑のやは上に置て。やゝ行。やいうになどゝて。何やいうやとを。べをざるも此故也。又を續きざる也。君の歎息を。喚と。問とを。いづれも急速の一統まれば。皆因に切て詞もつかれる也。扨まれるのゝを。ちゝ守どめ。ちゝとゝべし。例の三格は格を。古に出さぬ。

古一
谷うぜに。ゆくることのひとぐとにちへづるまやまのちつを。
後拾十四
いつゝ。ゆくまつるゝ。ゆくるなどゝ。ゆくるやまのちつを。
此歌を。やの指辭をうまて。第りの下に。ナランとゝべとを。さをゝ。ゆくるう歌故に。省る也。されば上れちの除ては。ナリケリと省きもの除ては。

ナリヨと省き。その際ってそ。ナルと省き。此やうてハ。ナランと省く。是上の指辭1限りてゞ。ゞさと受ざまと。可のことゝうけ足ある也。されて動ゐる言ゝて結ぶとゝる歌の叶の雖きゝとも。又省る語と加くく

新古十九

きゝば。上の指辭のさまで。ゞて入くゝ。やうぶゝ安きゝとも。ゞぎきゝり。

いゝ見くゝ川そくゝやさぶゝに秋の夕ナラン。□ちゝくゝれの松ゝ山ゆふ。うゞゼ。

玉の結ゝこゝそ。やのてゝをけ。秋とゝ。ゝをゝ。ゝうゝて。ゝ夕ゝでそ。ゝらずと

いゝる。例の者ゝぐゝり。やゝそ。ゝ夕ゝまでかゝりて。ゝ夕ゝやゝでゝきゝれの夕ナラン

のゝとゝるゝ。かくゝゝ須ゝてゝぞゝぎゝ也。又此除ゝ上のゝく格ゝ出されゝ

ゝゝや小野ゝ山の冬のゝさゝびゝ（キ限リナラン）ゝゝきゝせゝるものやゝゝろゝゞれゝ（キ限リナラン）

のゝゝゝゝとゝゝゝてハ。やの一格ゝ出せゝる。うゝゝ歌の。ゝれゝゝ。ゝあゝゝ

ものゝ格ゝ出ゝゝゝきゝゝゝゝ

此詞と共の結に切てやと極して、其歌云々て疑のやに語のなからば置て下と共
結び詞にて結ぶと語の終に置く切てとの二ッあり。ならばなくやを上を続
く詞より受るは大方誤なり。おのづから誤るは、いまきそのるとやどりて
置て切るやのよを必切て詞より受るは古人をおぼろめきて
一ッも誤るなきなりと。後世の人をさてそれば是と語りて続く格の詞
より受るは多しを例を一二出て、かきまいらでありやもやとそう
定まりまし。あらやなきやとそいくず。又ありきやるうきやとそう定
まるまし。あらーやるうもしやとそいくず。又ゆやきやとそう定まる
まし。ゆやきうやとそいくず。又ゆや、ちゆやとそう定りて。又
ゆやちやとそいくず。もぐて語のちぐめに至て切てやの上を
[illegible]の格とるべし。已上五緒といふ。事は此説の如くまれども其二ッのやは
紙のうかゝはゆゆしきを説くるは故に先ちぐめきゝやうれらはる也故ここに
聊の其釈を補ひ紀云ゆゑよりをとゝまりて先ッ五の緒にやちぐめに置やと
いふを即右に引る三首は奇のめく下を結ばぎる変半に置やといふは
紀一 神代紀にてむすびしてにられたると書つるのみやとくこ
同三 まつ山ふるひきくやいつるむ□あるそくるくもぎき
此三首にて下と結びたるといふ也さて続く詞あるほと切る
詞よりかくるこの二ッの差別はやと云て疑のみれ時を続く詞より受
続く詞より受るは故に其下をも又結びて続くむる也又喚問歎息
此三ッは音義一続なる故也等のとれ含る時を切て詞より受て切て詞
小其用格も又同しき也 故
より受るは故に其下も又結ばずして切もむる也。こそやのみよも限
也。於皆此例也。其をを一ッいちば。彼るぬるうの此きぬるか。乙ゆ
ぞうをなかきこゆるうる。ゆゆあ見おつるか。たつるか。たてつ

なり等の類も、下を云ひ続くる格の時は、ぬるゐ云ひ、なりぬるゐ云ひ、行ぬゐ云ひ、ゆるゐ云ひ、たつゐ云ひ、たてつゐ云ひ云ふなどの、ゐよる続くる例なるを、下の切るゝ時は、右等れ如く、上も又切るゝ、辞よ又受るゝ定又也。凡此等れ例を合て諭さば、合点の行安うるゆなるを、はた文まむつうゝくゝ云ひなせる。彼翁れ心ぐせまでである。さて玉の緒れ此條まで引又〜奇ごとの切れ又る下まで。何又も イカニと云れ含れる。問ふ方の奇のみ出あくる故也。即イカニを問うもるゆるやの言れ結ぶる也。かれば也続くと切ることの差を同じゆ言の中にも疑ふ方れ一統と、喚問・欲息の方れ一統を、ふ依てなれば也等の言れ続、又上下れ切又続きまぐらもてを。分つべきもぐるまで、唯あるば一置、少ぐらめ一置、まぐのをいるる故まで定うるらば絡らはしき也。されば玉の緒の其條ふ挙るる所の中にも、古今十四、あるふる荒で鳴るをるまぐしおのぐをむ恋のもとをもるまぐや 後拾十六、柏木のもれ下まれぐまで程のめを 同 やこれら也句れ中ぐめるれど、下まで又と云のまれば、

疑ひのやなれば也れるるはなると同格るると、彼欲息の格と一ツに混して出せるハ何ぞや。諭

其人ぐまでかるまで迷ふるゆれ多うるものと、同じてあるをくゝ、ふくきをと

ものまるかくて彼問ふるやの下まで、イカニと含るもと云を、右れ同じ中に。

後拾十 きくやいつまで 「うるの言るるぐ」

野若十三 るぐゆうまで直まで、ふと云言を、くくるも多ふて知ぐ程数まで

對くて、きまるや イカニ、浚ハるるや イカニ、又でまるや イカニ の類、推なずくて

ものまるん次まにも又合るぐさ可ぐもこれうる出ッ。

やを重ねる

古二 少しのくらにまるをきふくもの一とせとごとやいくんとやいくん

四三 やくらさくらやまどくるあくぐれわぐやくをもるごてにあく

果て疑の方なれば續く辭より受て二つのやをどと下に續くて結びて
新古七 あまの川かすみ立きくにとくはんをとづのさしはちるや。ちる歟や。イカニ
千十四 異又 ものどやいふ□あるねよめるとときくしあくぐれの。ヲバ
イカニ
こゝろを問ふをれ方あれば切て詞より受て二つのやをどの下と結ぶ。イカニ
と含みく切とて。狂うくやを変ぬる數なれ。かくるやうて。ありしよや義
ナルラン ナルラン ナルラン ナルラン
ありと。八やを言 霞やイづう。たのもとや。ヨボラン いるとや。ヨボラン などやうに疑
ひの方に續く辭の格もあると。玉の緒に二つに混じて言れ本義と得ざりし
故なるべし。又疑のやを二つ重ねて一つに結びてもあり。万葉四かくて
やはやうん。同七かくてやるにや老るんなどのごとし。

や何

後十三 あらふれどとるねどやとわづ納れうふ井のひううわうねやなどで。

新十 萩ごと共 他にうをてるさまをれをのよれやうひをよるや。
四歟とくくる詞のごとし。やの意也 何より上にうをくべきゆゑあるや
もとづき音義の除うくやさて考に。玉のやるふそぐら年。
「みやこのこゝやいうん」「霧やいう形る有るしん」などやうに者を
して待ひてるもあるに對て。君のごく省きたるとも知べきなり。
歟に。「妻ゆすてるやゾ」「玉ゆれのそゆやゾ」ナリ。まる
「君ゆいす立やゾ」ナリ。「みるあうかるやゾく」ナリ。「ぞ」の形に。合せて
得べし。

なぞや

後十 大くるそなぞやわづるれをそのうんかてうん
拾十 このねそなぞやうひくき。□を見ゆゾのうんのはまと人てかてうん
ヨ ヨ ヨ

此條と次と二つを合せて解べし。

なぞや

（上）なぞやうくさもくれぐるき大そらぞ。わづらふこころもあるとそ。ぞや。

玉の緒云大方何等は下を皆かと受る例なるに君の如くなぞとなぞ（カレ）（アラン）

とあ二つのみやと受る例あり其中になぞそうと受るゆ多くしてやと

受るもいと珍しなぞやと受る例のみなれかと受るゆ

（已上玉緒）

なぞ（上）とくちことはなどうと云はそ俗にハナゼニカと云をうしうそ

なぞと添る疑ひなればいつものやもなぞのトにやをかくうん

て古き所まもなそ六帖にはいつねとなどやわづらをあきらん

とあるそ奇のことも疑ひなれば写し誤りなそいとある

そ恐べき君は千載なる今一首風雅十三にあるそ写 誤りなること

知べし又なぞやもふ材そやはそよのことて其故を欲く辞なるは

うにはなぞうとうとうる例そなし。ぞらめをとうてはうるはべし。さて

うるのなぞ。なぞ等は言のことそ。次は何の條に出ッ。

あうてしのや

反語も等ことも文にも。世につねべ用ひ叶ひもはるある辞なれて何すもあ

も有用なるをあやにくくもふ入よくき辞なれば懇ふさくはるべき

はべれるをはるようをとをよくはとやるるものなり。玉の緒なぐまそ。

世べ簡條のみ十四五種に分ちて何のむつのくつひもせばおるる

の人共其種類は煩ハしく紛はすきにはるれうむはめるとまに

乃西。故をそをくをべに分ちるを唯續く辞ものかくれるは。

切く辞ものうれるとの二種に約て心得安くことはむとす所謂うち

うくーーとそ反を去て対をきうするて物に當る時殊さらに激て強く云辞也故恒に言れおそるる只何とかくの辞とハ用る場所ことなり かれど其を味ひとちくふくれバ假に卑き譬をて へくむに その俗言に人は我を侮るて へるを恒に強自慢をするゆ今夜墓所へ燈を點じにひとりそ得ゆゑを用ゐるひるん時彼言のをて へして ゆきてん へ行をやせんまどつひてハいつのうわくして悪げなる刃に ぬげふあらわるし故にそはそ わのづら侮り言に激まされて ゆ なるもも へユカナイデヤハとやうに答へら強く勢ひまり是即反語の場所なるである又成い此に誘る人あり て へわづかく拉らうに戴き居 此覺をは汝うをそうくるるる

[illegible]ものみぞあはれ。さて古人のいと自在にして、[illegible]
[illegible]場所と一つもとづくべはとて、[illegible]やうにいはれる所の人とも、[illegible]
[illegible]てもぞ、なれもぞ[illegible]て、適ていとば場所と[illegible]ぞ[illegible]
[illegible]。はづかしきわざかな。

古五
[illegible]

同十二
秋の田もりのいほをてらしけるつまのひかりはさながらもわれやらそらに

同二
ふる雨をなほてらしみよとひそかにわれやそらにあるべからず

同十四
[illegible]いなきふちやはさわぐ」とぞけのあらきせにてあるべきそ

同十六
[illegible]もあれ秋やはいとのわかるべき」あらしをえこそたこひしきものを

これらをもて結ぶべかりけり。上も又續く切りの受けられ。激みこそ。
[illegible]の奇なる。「[illegible]はうつる秋のあらんもやそは」。さそはのけで結ぶ。

[illegible]時のかりのいく對をいひ激したる也。次の奇なる。「[illegible]そ
[illegible]」。[illegible]しのるあるべ。われをもれぬものと女に對していひ激
[illegible]。[illegible]の[illegible]。[illegible]
[illegible]はとあるは。はを欲見して[illegible]やとふ[illegible]
ある方。はとき[illegible]。

古一
[illegible]

後拾二十
[illegible]

古二
[illegible]

後二十
[illegible]

古十八
[illegible]

同五
[illegible]

比類を下に待るべし切る所を置るゆゑに上に又切るく辭も来るなり。
激みくるる所をもじめの句をば。女れ「ぢれ」ぢれりと名まをそたてれば。なぜ
るるに激みて。わづらふ水されば。こそもれ。ふこぞはあるをもとをあり。
ふるにたらぬくうらのゆうまをとなぜ反せる也。次の句をば「らぢ」わるば
物と折ふ「やを」。「ぞ」「咲」「ゆ」「ま」「ま」「く」「な」も折るとなれと。今は「ま」と折る
加と答るこの「ま」。激るく「くるる」かの次の五音も此でうをこのく考へ
味をのべきと。我と。ぢの四の選ぶてつるるあるぐいやと。やはしのう。見も上れ
ぢし。ぢっ。のうき。悲ハ。の者こうるこうだ。いしのこうる浮うぐと此ハ
んこうへて雪ふる也ユーて。んと。れの主ふ。ばなるはぢハ下巻受辭部。
二十九段に出。又やハ。のひて。反語なるぐるもあり。そを疑ひのやと出もの
の法なる也。又だやこのひて。だあやと疑ひをあり。それを異なるあり

されば本書をゆづりて者なり。

やハとぬ

古一
さくらゐ春をくはれるをしぶるとんをこころにあれやをとぬ
四二
ほくくをを守ふ都もさこくくをびををちのをくれをとをくやハをぬ
新六十五
ゆゆしかるをうくくをとをくくををしををやハをぬ
これをおもしををあるず。其事を催して。詞をあり。上の反語の格以て
いなぐ。あれやをなる。こくやをなるとをぐき詞のか
ぬ。ぬをとをせねをあるををせねぞのををを。結句をを。ぬぐであれねぞ。あ
ふをを。ぬなぐでこくねぞ。養くをし。ぬぐでしをせねぞ。をををを
とぐれをををを。催促せられり。上を一つるれより。混くを。

わや

玉の緒ゝ比れやと五種ゝ分ちて五箇條擧れど同しもの相混りて其処々
そゝぐ三種なりとぞ考へし

古十八 水のみなかみに杉ゝを月れうきまれうきまれうすあれやれやとそゝてこぬ

後五 ひぐらしのゝ泣きくるもの近きもれやなきつるなぐたいりひさすゝん

此一種を疑ひのやうにて紅ばゝやのゝとられば前りをうんゝ結び又クスツヌ
フル等まて留てうんと含りゝるもあり

古十九 まくれば紅ばゝにまづ咲それどあるねど此恋のゝぐきたのゝ名るれやバ

同十一 ゆすりもゝもゝもあんゝのゝるれや「ゆすりもたゆくさゝ長ちひも

此一種を玉の緒ゝまりやハのゝとゝつゝもいゝぐゝりゝ續ゝを皆吹息の例
ふゝゝあれゝをゝ打ゝゝて紅ばゝをゝゝあゝねゝ」ゝつれゝゝゝゝゝ格ゝ

同十三 恋ふるば濃ゝつきゝのゝ名るれや「根ゝあゝゝれてゝるねぐゝゝ

後十二 ゝ結ゝゝゝあゝねゝゝゝゝゝゝゝれや「ゝをゝゝゝゝゝ名ゝ とゝゝゝゝば

此類を「ゝゝゝと疑ひを也ゝゝゝる是も前ごゝゝゝを切ゝて辭ゝて疑ひの例
を「ゝゝゝゝかゝゝゝゝゝゝゝや此処ゝ十六首引れゝる巻くゝゝゝのゝゝゝて
歌息を辭ゝゝゝれはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ疑ひのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

古十七 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

同八 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一一つづいく何まで云詞と聞きて其中間に云入てるて其の歌息上を
ちけつ同手也やとたてるては歌息のを再こきてわづかるて語の
けつとうなるんわづかやし
後十九
ちをすくるゆてどうちをたるおやをもぶきうちをく
後拾十二
ほどもすくらめるこうちをなるるおやをもたーう
ゆすどもとがなるるで〳〵いう所るでのを也とのくれどこれも物をのをに
して何ちもぎきるを下巻うを也せるふぶすう心何ちもちどを
ちを同例ちう紙をは歌息のよに通のやとるに結びと為てそのを
とるるは云きらづの也 右は歌人ども玉の緒二巻十一葉に出る合もべし うれは以上三種
を一ッるてはづめちう〳〵れば〳〵やのをと〳〵はのをと〳〵るのをと三種を
ると五種に分るる也 右は心得づくるる故也とて実を今一種頭

こをとのにやをうこをに出さづるをやをたうにたうるを
歌息にやの末るるう
やを
後八
けるるくしおのづるるにをけるるくんやーを。
拾二
やーーるるて一歌るるにあるるる

歌島のやを上ちなびくいづくに雲を切て峰より来るか沖はて
多くもれば忍合せてきぬぎし物語りうれを次に出ッ

の云云や

後拾十二
いうこもん□あれやくこの君れ上や□ちはの手をきれかくこうまーうば
金八
若くるーこやめる人れそうも者るあれとくこうろめきこみづくこうろや
此歌歌絶うこうこそ上ちれとこ歌島ちはきいうれる故也歌上はある
とびくこうもあれどそれくくて世つき物ひまて世やを物よりこを世そ
上るのそなの通音こなるのこを也そこの部こを世せる上とれわれ
なぐくこうこ「きくこれこのこうれ「きこ」世のこれよのくこ上つこそる世るこ
のこの歌こて世者のこれのそなこ物こて世とれわこのこうこ「世やこうこの
なぐこ世世まこれこのこうれこ絶ぐこ世世のをこなるのこ上いをきこ世

詞九
あぐ人をーぐこちの月るれや□ちゆこそこれ世ゆまーれ
千十二
あくこのくこたぐこるなこうれや□ほれるきくまくこるくころを
世の緒の此延 四巻二十一葉こ此歌の中あるこ出て上のこのすぐこをこ別種
こをぐこうこ世清れこを上れ 玉の緒を四六葉出 れやの一種こ撰こる
吉十三
風ふこれば波こうきしのれこれれや□根ふれこれれこれこれこれこ世
後十二
こうこくこもれくこぬ世こをゆれこれや□ぬこもれこれれきこのこを世れば
此歌こをここ世世ふ上 玉の緒を四 れ巻十六葉こを世鏡のやこ世こ
みこを世歌島こをこれこる世是又いこれこるこ世世れこ世ゆこぐこを世
後拾三
あこれ世の月ぐこれれやこれくこぎこ世世こ出ここ世世れゆこぐこを世
新勅十二
あこふここのせきこれこれこる世世あれやこれこの世世れこれこうこ世
朝忠集
ゆこうこをこぐこれこをここれこりこふこれこの人あれやこれこれやこ世

此類と彼アラくのことなれども同格なるもいうべきあるべし
発句のやうにて、ぐうくそあれば、俳諧は学ばれぬ人のなり、泥まんじゅうを思ひ
て、ぐうくに弁へなくふでなうる。きて此格を萬葉六に、むもうるかくるの
ひとあるうひる歌にしもあれや哉ヨカレ世はさかしく同ヒ、さくらの堅固なほ
ふかるるもあれや時ヨカレとまるんなどの歌にて、上に今一種あるべし。
ものれや即是也。

ものの

ぶぐあやふしの里。なほあやとほの山。うづくや高るの山。さら
しのやなどそこ。さのこの酒。此等を所謂呼出しのやとや
即よのこと也。又ものあやとなど。なるやなど。神ぬやいせなど
歌に枕詞なども呼出して續くるものなどを枕詞ともいふ。

拍子のや

ぶふるぶるさくやこのと。ほくぶ次まくやきの目。夕月よきやと問べれ。
ねるやねうるの。さくやるるれ。まくや表あれ。やくやきーほの。武蔵
を所謂拍子のやにて大うる句れ中間うるるうよのことなるもみを同じ。

ぞや

古三
さ月こだちまもふうるんほくぶまでぶほのあとときうけや、
伊勢一
こうろあるんくをぞやこのくるのちうはかうちのまのあーきと
此刻ふことれだやもやそれよのそうて。きうばやぶきうばよ。ぞやぞやと。
ぞやぞくナのこと。さうるに初句まぐにおきてもくうるそ。即ぞやぞくれ。
きうばやる。ぶくぶやれ。とぞぞやれ。ゆぞやるやなどのやく。ぞくの字と活
てよみきう。

○なふ

玉ぬ緒云、なふ、まで、なで、なれ、なづ、いく、そ、いふ、いで、ぞれ、ぞら、件の數、等てゐとけの結びぬ格同き故に一つに合せて何の部とすとあるは、そ此等の云はゆとと解むに、かくしも辞の數れをうられば得るはくもうのでび、ぬ、いく、うで採出てゐる、先ッなふのなハ、直、價などの通音にて、物ぬ分量とゐふ辞也、今の世れ言るも、直代直段など、價ぬ量にいふは、ふそ、荷と訓むと同く、物ぬ程とゐふ言也、などのとそ、底世と、常世とも通しゐとゐて、涯のとなり、外、門、戸、跡、留、止、終、まどの、ともおれし、次の誰のたも、此との通音なれば、下の釈に合せて、言ぬと味と考ふべしまどのそも、庭世ぬ、曽て、物ぬ際界涯をゐふ、上ぬいくそれ條、又下巻三轉部の初段等に出、たれのたそ、當代、量、價、直等ぬ、同語同意ぬ言なり、又他と

ゐるとゐふ、相手ぬものとかくきとゐなるのたも同し、れそ、等の轉也かくて何字とそと訓て、可ゐも可方とそゐくゐみとの平言に、ハドトハ、ハドナヲ、ハド邊などゐとし、此たの通音もれば、なれゐるなど、何ゐ、いゐ、いゐ、いゐ、ゐ、ゐ、ゐ、たづそ、右ぬたれの、等と省き、之と添ゐとゐれば、即誰之也、ゐのゐ、ゐ、ゐ、行に活轉て、髮のや、又數計のゐなどの通音、くそ員數ぬ、幾許のこれ通音也、いつれっそ、右のなどのくたれのゐなどの通音て、際當のとれば恒に其時と指當て、何時と云なども、違ゐぐゐる也、いふも、幾何ぬ、畧き言、いうづそ、幾許の約れる也、いうでハ、幾直ぬ約れる也、ゐそ以上三ッのいうのうハ、幾ぬくの轉用ゐゐ、相合せて知づし、いづれハ、何所等、いづゐは、何邊等の義也、此詞ハ、此條の末に出るれバ、其処にて委くことわるべし、先ッ大ゐるれゐて、其大略を心得てゐ、右ぬ中、なふ、いうでの詞ゐどゐそ、別義なるもあり、ゐそ其所

[illegible]

[illegible]

[illegible]

わるゝ中なれ。いうるやいうるなるこゝろ。のうをもいうるうを。
まゝ下と結びてるも多うれば。それに對へてそれ省きるをもあきら
うるこゝろ。

也

古十三 うばたまの中のうばくそちぶるゆめこゝろ。もふたりざわ
後拾四 さて中ぶを生てるゝもれいづく。もいまゝあきのゆふぐれ

玉の緒ゝ。

玉の緒ゝもと受る格に結びてかくけるぶるあり。そ貫徹る所以と男るに。
只そもそも所と相異る詞ゝて。もと添云勢ひあるゝわる彼と呼とと
相兼。物二ゝ。跨ゝて。疑の語も。物とたくゝぶゝ。ゝ。ゝ。ゝ。結
びまゝてゝ。かゝゝ。ゝ。ゝ。

百十七
梅のこれいつはをくじくいとねぢさるの伝うすとときのあり
此歌をかくして云ふこの事を對てそれまゝめ他の物と何とらくらべるたとも
ホカ時
とすずを其他のホカを思ふすず也いばくをあれどを他の所をあれど也其以
ものゝ傍ヨコ人ヨコ何ヨテいつぐし
他ホカ人をかくしてたれとのつる
古十四
こゝろのくれものぐるもわれゆゑこゝろぐれんくるまるまくる
他人
拾十一
生ぐるもさられゆゑまゝぬこのまれば
ホカ人
後四
ものゝ人をこゝろぐるまくにおくまま
古十二
こゝろまだたづねをくしの中は
ホカ人
後十二
ものゝもおもひのうはさをたるも
生ぐる他人
百十一
おもしのうはたづきん笠まゝ明くに
ホカ人

此歌をかくして人を對てこゝを他の人をたれたづねくるくしみ答まゝ
君をゆきて其他ホカの人ゆゑまゝこゝ也拾遺まゝものぐるもまゝとゆきて
他の人ホカ人ゆゑこゝ也物をさくこゝ傍ヨコ人ヨコ詞ヨコもて思ひくしこゝ
のくすをこゝ也こゝ也の緒ともいつくしみとまゝれど此をこゝ初の中ホカ
てこゝの人ホカ人をこゝ終ふまゝ多ゆゑまゝ出

古十五
あひくるまゝ出てこゝをこゝ中なるこゝあてなるいこゝ
後九
何ふこゝのこゝいつくこゝはこゝまゝ
此まゝこゝ出て出る疑の何ふこゝあるぶ
月ちぐこゝまゝこゝ歎は稱ふる故こゝ即て終くまゝくる也恒こゝ辞
のこゝこゝ出て終くまゝたなくこゝ入て終くまゝ是也俗言こゝ

ナニシニ為レコトブナガ悔てもれ。又たとえば此盃を汝が破リタルカ。と咎めら
れる時まで。否我デハナイ。否其ハ誰カ為シ。なぜ云ぬと是也。

かるかやん

古十四
あるさでのうるみもわれはもにちんさるてもこのあるくさのあくう
後十五
あるうぢんにつるのこるあをはもれくしおもとうづくあるよりて
古今かるも。否吾ん歌くたなづくを。後撰あるを。否吾ん悔とくもむを肌
るもしりにうづけるも。要結こゝあるしかをべる。拾遺十一なる。こゝろし
ちんあるたんこゝろ。こゝろ。こゝろ。こゝろ。こゝろ。こゝろ。こゝろ。こゝろ。こゝろ。の
こゝ。さて三句後の歌くをてこゝをふるもこゝろ。こゝろ。こゝろ。こゝろ。こゝろ。こゝろ。

まてしか

新勅十
ちらぶれさるうにはもがうにはもがうにはもが

其量(ホド)は計(ガリ)ごき方なり。疑ふ方ともなり。又も添て云時も。彼此と相兼て。其量(ホド)とくゝぶるゆゑのものもあり。又此(コヽ)の如く。何まぐさと云て。分量(ホド)まぐさともなる也。かにたまのとと云詞と。恒と長しとも。短心(ヒヽ)しとも。ふしの間れきなとおも用ると。同へ也。かくさまに云とゝりていふる。何そ伊勢物語下巻に。何のきみとおりて。又上巻まぐに。なぐふまきくのめ。源氏に。まぐのまうのくん。まぐもいひ。又今世の言に。何バカリデモナイ。まる。何デモナイ身分ジヤ。などゝ。ゆるゝも其ノ何ゝでもまへくゝゝふ也。

古八
うくるゝ　まぐゝぐはありてあるひそさてもとまゝぬ名ゝてあるん

四十二
いのちやそなまぐゝは。あるのあぐめとあるすゝ。ゝゝばとゝのゝ。ゝゝくゝ

同十九
ゝあるれどまぐゝぐはもゝくゝのゝるゝやれゝぶれてあれど何ゝくゝとゝし

ゝゝゝ其ゝゝゝられゝ何ゝの義ゝゝゝ

既ニえごとく。幾何の義なれば。幾量ーてと云心ぞくて。即ハそこまゐて
とゝも。おれじゆまゝゝのまゆやし。

いうで

拾六 たゝわるゝば。いうでゆゝくほぎゆゝ
四十六 ゝくしのくだおるゝじ名ゝゝて。おゝ
いうでゝ。幾直ゝ義なれば。是ゝて俗ゝ。何ゝぞ。ぞうぞなどゝ云ハ
なれ。即俗ゝ云。何ゝぞのゝ。そも涯のゝなれば。當直量などゝ。終ゝ同云
ゝ。おつゝゝ。又このゝいうでゝ。いうでうゝもゝゝ。何ゝてのゝをゝて。
豈のゝゆゝなれぞ。それハ省ゝる也。

ぞゝ

吉十七 ゝれのゝゝぞゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ

後一 松とひさしかれとはまがきなりめるといふ心
拾十九 ふるーうゝ。はくまのさつうふくせるをんなたちのうばごころ
ふるーう。又ふるーうとゝ云ふそこの辞。下までかゝれる故こゝにのみ
第ありて。主従と待びする也。ものゝ義なる故。ふるくそはこ
為うし。ふるこゝ為ぞくのものある也。ものゝ辞下までかゝる也。彼相兼るものゝ差と思ひ
る意なる故。こゝの辞下までかゝる也。彼相兼るものゝ差と思ひ
だゝぐし。

ふるーうと

拾一 いはーうゝ。あくゆくゝゝのつゆもてちやまてふるーん
八十一 ふるーうゝ。まのもるーにたゝるものそあしのもらんれ歌とかゝる
八十二 ふるーうゝ。ふゝゝて受るはそこゝ。ふるーうと結てふるーうと対とこゝ。

いつれ辞。ものゝ受きはゝ上へそかゝらねも但。まれ八ふるーうの果と
ゝ。ものゝ受るとあり。但撰八ふるーうトク咲と。ものゝ受るものゝ
ゝるたまと結ん。拾遺九。いはーうトクとあるてそれ八涙ちぐりあと
いるゝにあるのまきうる。同二十。ふるーうと待ツテ若みとゝりしまれ
をばけのちすでのそはみつる。なぐのゝしゝは世のすゝそふるーふ
とゝ見あれど。八代集までのすゝそをゝゝそこゝ。ものゝ受るもあれ
みもあるまでうれどやゝしくゝちゆるゝゝ。

つく

玉の緒云。ものゝ云辞。物ものゝ名をぐうにふくゝゝ。ふくゝ
ものゝひて。まきゝのゝ。ものゝ。ものゝ。ふくゝ。ふくゝ。ふくゝ。ふくゝ。ふくゝ。ふくゝ。
ふ詞也。玉の緒なぐ。班じられる。一ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。

を我集の下の句をも引出し傍れるもとより萬葉集中に
幾許と書るも幾ら許又と云意の字なるを既に上に
こきぶなどゝみて多き多きのもの久しきのもとなれば彼
上に代るもあれどもひとつにもつぶらし彼と世と上に某と云れ
あるも常に多くうるさきと論さんともげに古人の言は世の人はいと
もゆゑきものとも上に七例八十例五百重波千重波一重山
八重山千重山千重山七尾山峯峯の上の上七
とせ百とせ八百とせ百とせ百とせ此類の詞共ハ
に數多挙おかれ共に短歌に拙格
に此こを省かり何のもの知ても多くを數の言をもてあやし故に
初のごとく高くに雅びたもつをとせの人を右のごとく數の言をて
いとしかをもかるもれば上に某とゝつづめるをけに世俗の例ごとをもち

まをもつ拙くをもゆるもちもち

○こゝて

一こゝに三義あり其一のこゝを萬葉に乞字と書て弄ともちゝびあり許
曾上に表つき許增など形ふをふ多くゝみる是也こゝあの音に好嗜
請乞恋焦渇堅など云一続なり又此許曾と活うして上に許須莫
ゆめ上に許世如なもなど云也こゝもこゝもこゝの活用と合せて
思ふに一こゝを爲の鵜にて乞爲の義なるべし今集今集とゝいふが如き
もの爲の言れ今と活く所由を下巻三鵜部の廿二段に出ッ又此こゝの言
に社字とゝつ習ひ来つるを彼願望むをもむ神社に奉請など
もゝもち出る義訓なるやや其二のこゝて此其の義にて其物其事の
あるの中に此其と擬出て云辞なり右の二ッの中彼願ふを方を士

事記・万葉等の古き奇しの人・あまたくみて・古今集こまるの・可うそ・と
さ〳〵ぞこび・古今集以来・今ろくるるまで・普く用ふる所を・大うる此其と・
撰出て・云方れ一統のくるわ・さて彼・雅の格を・大うる皆除き来れば・
今用ひぎ海ろ紙て・ちく〳〵なきまれば・一二出もるわ・

古一 恵のれやくそあやる・梅のれをそ・ろ所ロ・ちやそわくる
拾三 やへ・ひぐ〳〵ぞ・ぞ所ロ・ぞ所ロ・ぞ所ロ

[illegible]

金七

[illegible]

新古十八

かきまもるすゑのくるよるにたまづむなるよ分[illegible]

此歌、金葉にもとり、拾遺集にいきてもあれとゝ云べきをいとの杉系ゝ

うけて、結びとゝ中ゝ[illegible]

[illegible]

の[illegible]

と加へても、結びの格ハ、妨げざる也、彼上の「形見ゝ[illegible]」の太野の千と、新

うね言ゝて結ぶゝ[illegible]

ゝとゝてもゝ[illegible]

古十四

万十一七どゝ

[illegible]

いきのとゝ[illegible]

此歌、[illegible]

ゞ大方の例ゝ[illegible]

拾雑のゝ[illegible]

を者ゝ也、古今ゝ[illegible]

ゝ切ゝ[illegible]

に切ゝ[illegible]

除ゝも此格ありて、[illegible]

者きゝ[illegible]

ゝゝ[illegible]

古十四
いそのかみ ふるのやしろの ほのぼのと
四十七
なりはてにけり
世にふるとは
つれなきものを
ひさかたの
あまのかぐやま
ゆきをしぞ
ふる
神代のことも
思ひいでらるる
世にふるとは
つれなきものを
ひさかたの
あまのかぐやま
ゆきをしぞ
ふる
又もあと
ふるの
ひとりあり
ゆきを
ふる
神もなりにし
なりぬ
ゆきを
ふる
新てちらしてあれ

古一
あまのはらふりさけみれば
後十
かすがなる
みかさの
やまに
いでしつきかも
月
見れば
ちぢにものこそ
かなしけれ
我
春の
月
夜
今
こそ
見
後と
相兼て
古歌
とひ
まと
危ぶみ
とる
なるべし
きる

既にもその際
古九
人のこころ
花
いろ
見
ばそ
いろ
あれ
花
もこそ
ひと
つ
花一
分
ゆ
ゆ
ば
ば
ば
ば
ば
ば
ば
四十一
もの
ぼ
の
ど
ち
ま
こ
と
人
を
ゆ
ば
ば
ば
ば
ば
ば
ば

此格を大うたはちうたぬもあり。
それ、ゆうべうらばなどうもうたぐらん。

ものもうて

後十一 あひそてばちくよりむやとて打ちしにまちしもてこひうち乱れ
番十三 わすれんそそとうぐとなりひてやるよりもうてゆめよりそ乱
——ものもうもの其のもの——歌の声にて恒るものと撰分らてつゝ語勢こそ
の詞と同をなりと。ものもうて強うるもの也。此ものの字阪上の引の条にいへり。
もべ——されば逢ふ夜も鶯もなきあかるもの打ちしぬ。
——きうて彼と此とを取分ちていうれり。又於きうて逢きんと
結ぶ比こそ夢うきうべきうのまうて。そそ忘れんとは比しも恋る
うまうよりて二つ合せて。そ二つとやり分らる也。是ものの結と却てのを

ものもうて。ものうれて。其のもの上首うて。いうも義のうをなる
ゆうれむうのでうし。

ものうて

拾二十 あをうぐ浮となるうるの——ものうるうるうる

古十三
うたくらはさもこそあらめ美濃とくらべかびき
金七
ゆかしくぶたあふとは忍ぶくさもこそ
拾十五
さもこそぱうつくらきこころもとも
月の結ぶ心ごとの一首のおもてをつめわたれどそぐつゝ当てのるき
そふふるこゝろは格と同じものる此歌わろしいまだ既に如く沈の約と
まり・結ぶ・其と指詞なれば詞もへそれわざ浦きゆうちもへ
浦ぐるとまたんこのかたくめ・なぐのをもいまと結ぶこと不添あるべ
意上れもこそもこそぱの例よごとし
こゝに結びと法うしる
續古十
きふふこゝろ人のこゝろもうろ
五社百
ゆかしこゝろこのゆもゆこゝ袖ゆ枝こゝろうしぶ

新千十七
きこゝぶこゝ結ぶのとわゞ名ふなどよぶむん関のふちハ
月の結ぶ・ふるの奇どもを・いをと結ぶ格とせるものわゞし・こゝ續古なるを
こゝろうへと結ぶべきと・結ぶうもわくぶけ・五社百首ふるを・こゝ
こゝふ・ふと結ぶべきを・ゆへ法うしてぶけ・新手なるもこゝにはらくしむ
受ふうゆへ法ゆしてこゝのをゆゆけふこゝをもゆの陶ゆ
ふゆはあゆ・ふれば
勅恒集
明ぬれば・ぶきふる形ゆれをゆるべしくれぞこゝをふとは
後十八
せきいきこゝる名こゝなゞれて・ゆこゝ・ゆこゝのふゆを
後拾十三
あふこゝはあゞゆゞこゝこゝきこゝ・ゆこゝのこゝ関ゆゞまゆる
かゆにふも・ゆこゝをゆこゝ・ゆこゝをもゆゞけふ・狂此かゆもゆこゝ
受ふゆゞ多ふゆこゝ・適ふこゝをもゆゞと受ふゆこゝ・ゆこゝ一格こゝ

ものなり。

かくてしらじめのこの條もう。此こゝの條までの。上指辭どものことゝなれて。

下卷なほ。下受辭どもの引あらぬ。ふたつの辭の置ざまうけざま。

うもゆちひ等のこゝ味とは。にうまくあらはく約ぐさまう。